

『耕土』大観堂版の成立

— 雑誌初出本文と対比しつつ —

村 上 林 造

山田多賀市の「耕土」は前編と後編各六百枚併せて千二百枚の大
作であり、昭和戦前期の農民小説として最も優れたものの一つであ
るが、現在まだほとんど研究の手がつけられていない。例えばその
前編には四種類の版があるが、諸版を比較して定本を作る仕事もな
お今後に残されている。本稿で若干の比較検討を試る所以である。

まず改稿過程の概略を述べる。「耕土」前編の執筆が始められ
たのは昭和一二年秋で、第一章が昭和一三年三月末に脱稿してから、
同年七月にかけて順次七つの章が脱稿した。原稿は残っていないか
ら、現在見ることでできる最も早い本文は雑誌初出のものである。
それは、昭和一四年三月から昭和一五年一月にかけて、第一章〜五
章は「槐」に、第六、七章は「現代文学」に掲載された。雑誌掲載
が終わって二ヶ月後の昭和一五年三月二十三日、「耕土」前編初版
が大観堂から刊行される。雑誌初出から大観堂版への改稿は大がか
りで、作品全体に互って手が入れたが、表記の変更だけでなく

作品内容に関わる大幅な改稿も施されたのである。その次の版は、
昭和二二年一二月に文化山梨社から出版された。底本とされたのは
大観堂版であるが校正不十分で誤植のめだつ版である。その後三〇
年近く「耕土」は発行されず、昭和五一年六月に至って「土とふる
さとの文学全集」(家の光協会)第四巻に収録されて、四度目に世
に出る。これが現在までに刊行された「耕土」の最後の版であり、
現在の読者が比較的容易に読み得る唯一の本文である。これは底本
が文化山梨社版であるため、誤植の多くをそのまま引き継いだ版と
なっている。要するに、「耕土」には、①雑誌初出(昭和一四年三
月)昭和一五年一月)、②大観堂版(昭和一五年三月)、③文化山梨
社版(昭和二二年一二月)、④土とふるさとの文学全集版(昭和五
一年六月)の四つの版があるが、大きな改訂が行われたのは大観堂
版だけなのである。従って、定本作成にあたっては、大観堂版を雜
誌初出と比較してその異同を検討し、そのいずれかを底本とすべき

かを選定しなければならぬ。本稿で大観堂版の性格について考察するのにも、それに向けての準備作業の一つに他ならない。

大観堂版本文を雑誌初出と比べると、まず目につくのは表記の変更である。誤字や送り仮名の訂正、発音どおりの仮名遣いから正しい歴史的仮名遣いへの訂正、句読点位置の変更等、夥しい表記変更が目につく。だが、それらの多くは表記変更というよりむしろ誤記訂正といふべきものであり、そのことは作者山田多賀市が雑誌初出原稿を書く段階ではまだ漢字や仮名遣いの表記に十分習熟しておらず、大観堂版への手入れの中でそれらを学習していったことを示している。もとより、手入れは誤記訂正だけでなく、雑誌初出に類出した擬音語や擬態語が大幅に削除されるなどの表記変更も多いのだが、やはりそれ以上に重要なのは内容により深く関わる改稿であろう。作者は、大観堂版の「後記」で次のように述べている。

此処に上梓する本篇は、五章までは「槐」に、六七章は「現代文学」に、発表したものを、大井（広介）氏や杉山英樹氏に批判してもらつて、更に三度書き改めたもので、「槐」所載の分は、全然面目を一新した部分も少なくない。しかし、まだ現在の私の力では、意図するだけのものを十分表現する力が無い。／＼これから一生懸命勉強して、数年後には銃後の農村を描いて一人前の長篇作家として、見参したい野心をたくましくしてゐる。

作者は、「まだ現在の私の力では、意図するだけのものを十分表現する力がない」と言うのだが、それは逆に言えば、大観堂版の改稿を子細に検討することで、作者の「意図」を推定し得るということでもあろう。作者はこの改稿で何をめざし、どのように手を入れたのか、以下で、雑誌初出と大観堂版本文を比較しながら考えてみたい。

1

小説創作において人物表現が重要な課題であることはもちろんだが、大観堂版ではこの点においても多く手が入られる。ここではまず、玄米を売ろうとする信吉がプロカー嘉太とのかけひきのち産業組合事務所に見れ、事務員である週造とやりとりする場面から三ヶ所引用する。上段は雑誌初出本文、下段は大観堂版本文である。（以下同じ）

〔引用一〕信吉が、産業組合事務所に見れる場面

| | |
|---|---|
| ひとまずせぶみをすますと信吉は、其処から今度は部落の購買組合の事務所へやつてきた。 | ひとまずせぶみをすました信吉は、今度は村の産業組合の事務所へ通りがかりに立寄つたといふ様子で現はれた。 |
|---|---|

（傍線は引用者 以下同じ）

〔引用二〕組合の肥料を奨める週造への信吉の反応

| | |
|----------------|----------------|
| ふむ、一応つなづいた信吉は、 | ふむ、一応つなづいた信吉は、 |
|----------------|----------------|

それを見ながら頼へうす笑ひを浮かべ、「穀物は完全肥料だけで育てるものじゃねえ（略）」と分析表をおしかへした。

〔引用3〕小麦の出荷を求める週造への信吉の反応

「小麦を組合へ出荷する約束があれば、小麦代金を支払ふ時に差引するかんな。」／「ん、まあ考へてみて徳になる方法をえらばあな。」などと信吉は気のない返事をしてゐた。

信吉が産業組合事務所に見れた場面へ引用1について、雑誌初出本文では信吉の行動に特定の意味づけが見られないのに対し、大観堂版では自分の狙いを見破られまいとする彼の狡猾な思惑が明確に示される。また、産業組合事務所に入った信吉が肥料を奨める週造にどう反応するかを描いた部分へ引用2では、雑誌初出では「頼へうす笑ひを浮かべ」た信吉の気持ちは描かれな

この若者は俺が何の目的で来てゐるかを知らずにゐる、こんなことで何の商売だつてうまく行くはずはないと腹の中であざ笑ひながら、「穀物は完全肥料だけで育てるものじゃねえ（略）」と分析表をおしかへした。

〔引用3〕小麦の出荷を求める週造への信吉の反応

「小麦を組合へ出荷する約束があれば、小麦代金を支払ふ時に差引するかんな。」／「ん、まあ考へてみて」信吉は気のない返事をした。

信吉が産業組合事務所に見れた場面へ引用1について、雑誌初出本文では信吉の行動に特定の意味づけが見られないのに対し、大観堂版では自分の狙いを見破られまいとする彼の狡猾な思惑が明確に示される。また、産業組合事務所に入った信吉が肥料を奨める週造にどう反応するかを描いた部分へ引用2では、雑誌初出では「頼へうす笑ひを浮かべ」た信吉の気持ちは描かれな

大観堂版は彼の内面を具体的に表現して狡猾さをより明確に示す。そして、「麦を組合へ出荷してほしいという週造への信吉の反応へ引用3」では、「徳になる方法をえらばあな」という言葉を大観堂版では省略する。確かに、自分の狙いを相手に悟らせないことを取引きの要点とする信吉の考えからすれば、こんな言葉をわざわざ言うのは不自然であろう。大観堂版では、信吉は自分の内心を知られまいとする態度を強調する方向に一貫して改稿されているわけで、それは確かに彼の狡猾さを具体化する上で効果をあげているといえる。

しかし、人物像の確な造形とは、人物内面を具体的に表現することだけで可能になるのではない。小説の登場人物は、他の人物との関わりの中で相互に独自性を浮かび上がらせるのだから、人物相互の関係がどう捉えられているかも大きなポイントとなる。この観点から大観堂版をみたらどうであろうか。次に引くのは、ブルジョアジーの性格を農民との関わりで説明する場面である。

〔引用4〕田所七造のブルジョアジーとしての特質を説明する部分

満州事変に次いででの上海事変のあと、日支日ソ進んでは全世界の風雲は嵐をはらんでゐる今日、且ては一地方の豪農の子に産れたとは云へ、中央の名士の満州事変に次いででの上海事変のあと、日支日ソ、ひいては全世界の風雲は嵐をはらんでゐる今日、昔ては一地方の豪農の子に産れたとはいへ、中央の名士の

案内役でしかなかった田所七造が、今や準戦時体制に乗じどれだけ彼の資産は膨張するか、日本と云ふ国家の飛躍発展と平行してどこまでものびて行くのではなからうか。まだ年齢六十才、百姓とは違うこうした階級の男の、働盛の年齢である。

案内役でしかなかった田所七造が、今や準戦時体制に乗じどれだけ資産を膨張させるのだらう。日本といふ国家の飛躍発展と平行してどこまでものびて行くのだらうか。まだ年齢六十歳、働き疲れて役にたたなくなる百姓や労働者とは違ふかうした階級の男の、働盛の年齢である。

雑誌初出でも、「百姓とは違うこうした階級の男」という表現でブルジョアジーと百姓は一応対比されていた。だが、大観堂版の「働き疲れて役にたたなくなる百姓や労働者とは違ふ」という挿入句はその対比を一層具体化し、農民の仕事が短期間に肉体を消耗する激しい肉体労働であるのに対して、ブルジョアジーの仕事は長年の経験からの的確な判断と見通しが要求される知的なものであることが際立たせられる。一方が「役に立たなくなる」年齢に他方は「働盛」というの、労働内容から日常生活のすべてに至る両者の際立った違いを実感させる。

次は、貧しい小作農豊七が繭を売りに行った市場で、あまりの値段の安さに繭を売ることを拒否する場面である。

〈引用5〉豊七が市場で、安値で繭を売ることを拒否する場面

「誰が売るもんかな、俺あ売らねえぞ。」豊七は人間と籠との間を泳ぐようにして、ポンドへのせられてある自分の繭の方へ行つた。彼の後ろでクス／＼笑ふ者があつたが、この大勢の人間に喧嘩を売る訳にも行かないので、青くなつて虫を殺し、そこにほうりだされてある自分の繭を袋へ移した。

「誰が売るもんかな、俺あ売らねえぞ。」豊七は人間と籠との間を泳ぐやうにして、ポンドへのせられてある自分の繭の方へ行つた。同じ百姓仲間のくせに、自分の繭の出来が少しい奴であらう、彼のうしろでクスクス笑ふ者があつたが、この大勢の人間に喧嘩を売る訳にもゆかないので、青くなつて虫を殺し、そこにはふりだされてある自分の繭を袋へ移した。

大観堂版でつけ加えられた「同じ百姓仲間のくせに、自分の繭の出来が少しい奴であらう」という挿入句は、豊七の繭の出来の悪さを他の農民との対比の中で示しているが、同時に繭を商人に買い叩かれる農民が僅かな価格差によって連帯感を断ち切れ、相互に嫉妬や優越感を抱きあう一瞬を鮮やかに描き出している。この挿入句によって、豊七と他の農民、商人との社会的関係が際立たせられるのである。以上の改稿は一見ささいな変化にも見えるが、人物の

個性を相互関係の中で捉える指向が、大観堂版では雑誌初出よりいっそう強いことを示す。とはいえ、もとより人物の対比それ自体が重要なのではなく、そのような関係を人間に強いる現実がよりダイナミックに捉え出されてくる点が重要なのである。そして、そのように人物の対比的把握が強調される中で、人間像そのものに変化が見られる場面も生じる。その例を嘉太について見よう。彼は村の商人叶屋の臺下のプロローグで、ぬけぬけなく立ち回って小銭を稼ぐことを仕事にしている人物である。

〈引用6〉嘉太の人物説明

宿場には嘉太のように、百姓ともつかず商人ともつかぬ中途半端な、真剣には働けない妙な人種が沢山あつて、おまけに今に到るも顔役と云ふ者さへあるのである。この人種は人生になんら参与する処もない寄生的存在だが、只一つ特徴なのは、近郷二里や三里四方の百姓の生活なら、まるでのぞいて見てゐるやうに裏の裏まで知つてゐた。

おまけにその宿場には、嘉太のやうに、百姓とも商人ともつかぬ、耕す土地を失つた中途半端な連中が沢山ある。近郷二里や三里四方の百姓の生活なら、まるでのぞいてゐるやうに裏の裏まで知りつくしてゐて、僅な隙でも見付けたら最後喰下つて一銭でも多くかすめ取らうと目の色変へてねらつてゐた。彼等は豚もあつかへば兎も買ひ出す、

米表は勿論、古俵から死馬の皮までも、出来るだけ安く手に入れて、高く売る術策にふけてゐた。

雑誌初出では彼等は「真剣には働けない妙な人種」「人生になんら参与する処もない寄生的存在」と否定的に裁断されていたのが、大観堂版では「耕す土地を失つた中途半端な連中」に変えられている。これは、単に人物評価が外在的否定から受容的肯定に転換したというだけではない。対比関係から見れば、「真剣には働けない妙な人種」とは「真剣に」働く農民と対比された見方であり、「耕す土地を失つた」人間とは「耕す土地」をまだ持っている農民と対比された人物把握である。前者では農民とプロローグは固定的な対立関係にあつて接点をもたないのに対し、後者においては「耕す土地」を持つてゐるかどうかは異なつていても、苛酷な条件のもとで必死に生きる点ではむしろ両者は共通している。つまり、この改稿において、嘉太は単に否定される存在から、農民と共通の基盤に立ちつつ差異を孕む存在に転換されているわけで、ここでは人物特性を異なる対比関係の下で捉えることで、人物把握がよりダイナミックなものになつてゐるといえる。

だが、小説の登場人物の特性は、ある場面を通してだけでなくス

トリー展開の全体を通して表現される。ストーリーは、登場人物の価値観や意思、行動が相互に関係を結ぶことで紡ぎ出されるが、その中で描き出されるのは、個人の価値観や行為は時代によって規定されつつ同時にそれらの集積が社会や時代を作ってもいくという相互関係であつて、そのようなトータルな現実の中でこそ登場人物の特性が表現されるのである。従つて、次に、登場人物が相互に関わる有機的全体としての作品世界をストーリー展開に即して検討し、大観堂での手入れが人物像の変化とどう関わっているのかを検討したい。

2

大観堂版の手入れは多岐にわたるとはいえ、大幅な場面の追加や差代えが作品全体に及んでいるわけではなく、それらはほぼ第四章に集中している。そして第四章とは「耕土」のドラマが本格的に展開し始める転換点なのである。この章以前では舞台は甲府近郊の台地の村に限定され、登場人物もその村に住む人々だけであつたのに対し、この章で舞台は甲府の高級旅館に移され、ブルジョアジーやその輩下の政治家達が新たに登場して来る。そして、そこで村の地主石田彦次郎が彼等に発電所用地として耕地を売ること、その後村人の運命が大きく揺るがされていくことになる。従つて、この章がどのように改稿されているかは、作者が「耕土」のストーリー

をどんな方向に展開しようとするかを見る上で、重要なポイントになつてくるのである。

第四章の中でも特に大きな改稿が施されるのは第三節で、雑誌初出で原稿用紙約二一枚分だったものが約二八枚分にまで加筆される。雑誌初出では、主要なできごとは地主石田彦次郎の息子彦英のダンス教師になりたいという願いとそれへの彦次郎の反応だけだったのに対して、大観堂版では石田家の日常と在村地主の生活が説明され、地主屋敷の蔵の改修工事、昔の地主と今の地主の対比説明等が追加される。そしてその中で、石田彦次郎の歴史的位置と性格が次のように説明される。

石田彦次郎は、小作人に対する限り、貪欲な地主であり、金利生活者として現れてくるのだが、一度自己の身邊のこととなると「お大尽育ち」の、間ぬけた所をさらけ出してゐた。(中略) 勿論広い納屋は雇人達の藁を打つ音の絶えた当今、全く不必要と化してゐるにもかかはらず、彦次郎はこれに年々修理費をかけて維持しようとしてゐる。彦英には、父のその考え方がよく解つてゐた。彦次郎は、屋敷を取囲む巨木や建物を、祖先から受け継いだまま維持することをもつて、石田家の名譽とし、自らの社会的地位を明示するものであると、骨の髄まで信じきり、そのための高利貸であり、小作料取立のかけ引きであり、来客への接待でもあつた。彦次郎と同じ世代の同じ

身分の人々で社会の変動を認識し、その波に乗つてゐるものは、新興ブルジョア田所七造となり馬占山河内再太となつた、取残されたうすのろが石田彦次郎である。

ここでは、地主階級は「社会の変動を認識し、その波に乗つてゐるもの」とそれに「取残されたうすのろ」に分類され、後者である石田彦次郎の認識の古さとその限界が前者との対比の中で浮彫りにされる。大観堂版で人物の対照的配置が強調されることは先に触れたが、その傾向はここにも明確に現れているのである。では、そのことが大観堂版の登場人物の把握にどんな影響を与え、人物像の变化とどう関わるのか。

人物像の変化という点から見て、最も注目すべき登場人物は石田彦次郎の息子の彦英である。雑誌初出における彦英は、大学卒業後も定職をもたないまま音楽家知摩子を妻に迎え、三十才になってダンス教師をめざしている。第四章第三節には、田所七造が絵の展覧会で彦英夫妻に出会う場面があるが、そこでは彦英は「流行づくめの服装のテカ／＼と油で頭髮を堅めた(中略)若い男」として登場し、その姿は田所七造の目には「そろひもそろつてゴルフやダンスやドライブばかりに日を費す」「非生産的な無気力な連中」として映る。また、彦英に同伴された妻知摩子は、「顎の少し尖つた女」で「田所七造の後ろ姿をふりむきもせずに、フンと問題にしないといふプライドを誇示し、石田彦英の腕をとつて颯爽と会場へ進ん

だ」と描写され、高慢さが強調されている。四章三節にはまた、彦英が父に金を無心する場面があるが、そこで彦次郎は「有りそうでねえものが錢だが、俺あ土地を銀行い抵当に売って汝等の学資送つてゐたゞ」と家の内情を説明する。しかし「彦英には一向それは解らない。彼はこう言う。

「だから僕は自活の道を開こうとしてゐるんです。お父さんの云ふように地道に考へて、サラリーマンになることも僕は考へてゐます。けれども私立大学を出たらひでは、どれだけの月給になると思ふのです。高々六七十円です。それだけでどうして生活が立ちますか。せびろ一着買うことすら出来ません。僕はせびろを月賦で作る様なみじめな生活はいやです。」

雑誌初出での彦英は家の経済的危機を理解できず、サラリーマンになることさえ拒否する無能力者なのである。それに対し、大観堂版の彦英は次のように描かれている。

彼は私立ではあつたが、四年前に大学を卒へ比較的順調にこの県出身の実業家の支配する会社に就職もし、去年の春、知人や父のすすめに従つて、家相当な所から新妻もむかへて、東京で自活してゐたが月給は何しろ六十五円だつた。

ここでは、彦英のダンス教授志望は削除され、彼はサラリーマンとして登場する。また妻が、高慢な音楽家から「家相当な所から」迎えた女性に変わっているのも見逃せない。また、彦英には東京高

等工業に在学する弟がおり、雑誌初出では彦次郎の目から見た彦英への蔑視と弟への賞賛は極めて対照的なのに対し、大観堂版では次男の比重が軽くなり、相対的に彦英の価値は重くなる。これらと連動して、大観堂版では先に見た雑誌初出の展覧会の場面も削除されており、全体として、彦英の否定的イメージは大きく軽減されるのである。では、このような大観堂版での彦英の変化は、作品展開においてどんな意味をもつのか。

大観堂版の第四章第三節には、東京から帰省した彦英が屋敷の蔵の改装工事を見る場面が新たに加筆挿入される。次のような場面である。

都会のアパートに見積つたら、五十家族はわけなく住めさうに広い屋敷の建物に、年々修理費だけでも小さな家の一つ建たる程かけた上に、二十年か三十年に一回づつは、かうして壁土をはがし、屋根をはがして大修理を加へるのだつた。日本の建築、ことにかういふ地方の農家程、無闇に土をぬたくりつる建築方法はないだらうと彦英は想像した。(中略)祖先からこんな広い建物を受け継いだ者こそいい面の皮で、家屋を祖先の意志のまま持ちこたへて行くだけでなみ大抵でないと、そんな風に観察した。彦英は、家の中へはいつて、父彦次郎に、庫を一つだけ残して、二棟の庫と納屋はこの折に取壊してしまつてはどうかと進言しようと思つて、引返しかけたが、今の石田

家の世帯は父の胸三寸で切まはしてゐるのだし、そんな注告を到底素直に受入れる父でもないので、中途で思ひ留まつた。彦英のものの方には若い世代の柔軟で自由な目が感じられ、彼は現在の石田家の状況を理解して進むべき方向を正確に見取っている。雑誌初出の彦英が単に享樂的な無能力者であつたのに比べて、大観堂版の彼はサラリーマンらしい現実的経済観念をもつており、そのような彼の意識は父彦次郎の意識と鮮やかな対照を示しつつ、石田家の現状を照らし出している。即ち、石田彦次郎の意識の古さは新しいブルジョアジーや息子との対比の中で際立たせられるのだが、そのような古い意識を自ら克服できない地主は没落するほがなく、新しい意識を獲得した者だけが支配者の位置にとどまりうる。このように両者を対比しつつ時代状況の中に位置づけることにより、大観堂版は、地主小作関係に基づく明治期の農村から近代的農村へ移り変わる昭和期農村の過渡的性格を表現しているのである。大観堂版改稿の意味はこの点において確認されねばならない。以上のようにみれば、大観堂版第四章の大幅な加筆と改稿、またそれに連動する登場人物の改変、とりわけ新旧の農村支配者の対照的描き分けは、作者自身がその「後記」で言うように、作品の「面目を一新」するものであつたといえるのである。

では、作者山田多賀市は以上のような大観堂版への改稿を、どこから着想したのか。この問題を考える上で見逃せないのは「耕土」統編である。なぜなら、大観堂版の改稿は統編と密接に関連していると思われるからである。統編の内容に目を向けてみると、ここでは彦英が新しい村の指導者としてクローズアップされ、彦次郎の死後は傾きかけた石田家を改革し、さらに新村長として村の改革にも乗り出していく。他方、村の中で生きる道を閉ざされた豊七は、一攫千金をめざして朝鮮へ渡るが失敗し、天然痘にかかって村へ帰ってくる。貧しい農民が植民地に活路を求めても、成功する可能性は低かったのである。また、村では大資本による発電所建設が進み、それに伴う木の伐採や材木運びだし等によって現金収入の道が開かれ、経済は立直る兆を見せ始める。発電所は昭和十二年夏に落成するが、ほぼ時を同じくして盧溝橋事件が起こり、戦争への予感が一気に高まる。軍需インフレが進行する中で青年達は軍需工場に流出したり軍に召集されたりするようになる。しかしなお耕地不足を懸念する彦英村長は、満州移民の可能性を模索し始める。統編の内容を以上のように概括してみれば、それは明治時代の地主制を基礎とする農村が新しい農村に転換していく過程を、日本が戦争へ突入する過程と重ねて表現していることがわかる。その中心人物として活

躍する石田彦英は、農村改革の要に在るわけだ、統編での彼の活躍は大観堂版での人物像の変化なしにはあり得なかつたといえる。

それでは、大観堂版と統編の原稿はどの時期に書かれたのか、両者の密接な影響関係が可能な時期であったのかどうか問題となろう。執筆時期があまり隔たつていけば、相互の関係は希薄にならざるを得ないからである。既に述べたように、「耕土」前編は昭和一三年七月に脱稿し、昭和一四年四、五月の浄書を経て、昭和一四年三月から昭和一五年一月まで初出雑誌に連載された。他方、大観堂版は連載終了後二ヶ月後の昭和一五年三月に発行されたから、その原稿は昭和一四年冬かおそくとも昭和一五年初めには印刷所に渡されたはずである。つまり、大観堂版への改稿は昭和一五年一月の雑誌連載終了後にとりかかつたのではなく、昭和一四年五月の初出雑誌原稿浄書の後に始められ、同年冬まで続けられたと考えられる。では、統編はどうか。作者は、昭和一四年六月段階で既に「統編にとりかかつている」と述べているから、前編の浄書直後にはもう統編は書き始められていた。そして、大観堂版「後記」（昭和一五年一月二十日付）に「昨年中に脱稿した統編は……」とあるのによれば、統編は昭和一四年末までに脱稿していたことになるし、「三十代の決算」⁽¹⁶⁾には昭和一五年春には「統編六百枚を書きあげていた」という記述も見える。以上を総合すれば、統編はおおよそ昭和一四年六月頃から昭和一四年末か一五年春あたりにかけて執筆されたので

ある。つまり、続編の執筆時期は大観堂版の改稿時期と重なるか極めて近接していたのであって、大観堂版の改稿が続編の展開を視野にいれ、両者の整合性を顧慮しながら行われたのは間違いないであろう。

さらにもう一つ、作者を大観堂版改稿へ促した要因として、雑誌初出へ寄せられた批判を見ておかねばならない。作者自身が「大観堂版〔後記〕で、これを「大井（広介）氏や、杉山英樹氏に批判してもらって、更に三度書き改めた」と言っているからである。杉山英樹は「槐」に「耕土」連載中の昭和一四年一月号（前月の十月号に「耕土」第五章が掲載された）に「農民性の表現についての感想」を寄せ、その中で「耕土」の人物に触れて「これらは、率直にいつてかなりによく農村の現実における農民の姿を捉えてはいる」が、それだけでなくさらに「うつくしさとみにくさ、比類なき篤実さと卑屈さはまる狡猾さ、夢想に近いまでに彼等のころにあふれてゐる明日への希望と宿命的な絶望とさへ考へられてゐる今日のみじめさ、かうした鋭い食ひ違いをしめしつつも、なほ生活の実際においては、不可分なからみあい、もつれて、農民の複雑な性格をつくりつつある人間性のすべてを捉へんことを衷心より切望せざるをえない」と述べている。そして、山田多賀市が「耕土」で「嘉太のごとき人物」について「人生になんら寄与するところのない寄生的存在だときめつけ」た点について、彼等は「生きてゆくために

（中略）自衛の本能で、自分らの敵の公然たる永遠の社会的な陰謀からわづかに身をもつて逃れ」るしかないと述べて、その意味をより内在的に把握すべきだと指摘している。山田多賀市がその批評を大観堂版に生かそうとしたことは、先に見た嘉太の人物像の改変が、杉山の指摘に沿っていることに示されているであろう。また、大観堂版では、小説の舞台である山梨近郊の村の風土的説明が挿入されるが、それは杉山が「農業様式そのものは、非常に地方的な諸要素によつて（中略）深い影響を受け」るから、小説は「その舞台となつてゐる地方を明確にすること」が重要だと述べた事（註）と無関係ではないだろう。作者が杉山の「耕土」評を受け入れ、それに基（註）づいて手を入れたことは、大観堂版の農村や農民の表現をより現実に即したものとする上で効果をあげているのである。

*

以上で、大観堂版「耕土」改稿の概略を追跡して、雑誌初出本文との違いについて検討した。そのあらましを整理すれば次のようになろう。まず、文章表記は大観堂版で大幅に訂正され、整理された。それによつて文章が読みやすくなっただけでなく、場面描写や人物内面は具体的に際立たせられ、人物相互の対比関係も明確化された。作品全体の展開についても、「耕土」続編との関連を視野に含みつつ、当時の日本農村が向かつていた方向性に照らして歴

史的社会的な説明がつけ加えられ、登場人物相互の対照性を強調してその社会的位相の明確化が計られた。大観堂版は、作者の創作意図をよく反映して、様々な点から雑誌初出より優れたものとなったと言えるのである。「耕土」の定本を作成する際に底本とすべき本文は、やはり大観堂版が最もふさわしいということになる。

しかし、そのことは大観堂版を絶対視し、雑誌初出を未完成な本文として無視してもよいということではない。なぜなら、大観堂版で文章が整理洗練されたことは確かにしても、それによって逆に何が失われた可能性も一概に否定できないからである。例えば、雑誌初出の荒々しい迫力や生命力が減じたということはないか、また歴史的社会的な説明が加えられることで作品世界の歴史的意味は明確になったとしても、小説は歴史叙述ではないのだから、それをもつて直接文学的評価と直結するわけにはゆかないという問題も残るのである。そもそも、小説展開を歴史の動きに併せて上から方向づける傾向が強くなれば、他方で、登場人物の意思や行動のからみあいにによる下からの自律的なストーリー展開のちからが弱くなり、作品展開が一面的で平板になるということもあり得る。総じて、小説の改稿が成功したかどうかを、作品が読者に与える感銘の深化という点から問題にしようとするれば、これは一筋縄でゆかぬ大変難しい問題なのである。本稿では、幾つかの観点から大観堂版を雑誌初出と比較し、優れた性格を認めたのだが、それによって大観堂版の特

性すべてが論じ尽くされたわけではなく、なお多くの問題を残していることは確認しておかねばならないのである。後日の課題としたい。

注

(注1) 大観堂版「耕土」(昭和十五年三月)「後記」の記述による。

(注2) 「耕土」続編は早くに執筆されていたが、雑誌掲載は戦後まで行われず、単行本としては現在もなお刊行されていない。続編を掲載した雑誌は、「文化山梨」(昭和五年一月)と「農民文学」(昭和二年九月一二月)の二誌である。

(注3) 誤字や送り仮名の訂正は、例えば「歩る」を「歩る」に訂正し、「心好い微風」を「快い微風」、「速座」を「即座」など。また仮名遣いの訂正は、「植えた」を「植ゑた」、「面白くてたまらぬように」を「面白くてたまらぬやうに」、「百姓とは違ふかうした階級」など。その他、句読点の変更は一例だけ引く。雑誌初出では「え。?。なぜ。」勝太郎は、はすかしめられたようにキツと、タネの方を真直に向いた。」という表記が、大観堂版では「え?。なぜ」勝太郎は、自分がはすかしめられたやうに、きつとタネの方を真直に向いた。」と訂正される。雑誌初出で濫用された記号や句読点の多くは大観堂版で削除され、句読点位置も妥当な位置に変更される。

(注4) 彼は小学校も四年しか行かず様々な職業を転々としたため、小説を書くまで「コンマもピリラドも打つことを知らず……」という状態であったという。(俺の師匠「槐」昭和四年八月)

(注5) 「馬は、苦しうにビヒンと嘶いて」↓「馬は、苦しうに嘶いて、」彼は入口の戸をヒツタリ閉めきつて」↓「彼は入口の戸を堅く閉めきつて」等。

(注6) 彦次郎が彦英について「こいつは極道で話にならぬ」と言う雑誌初

出での激しい侮蔑が、大観堂版では「こいつは何もわからねえ」と軽減され、発電事業への投資を勧められた時の、「何も彼も次男が学校でてからのことでございます」という、次男への強い信頼を示す言葉は大観堂版では削除される等。

(注7) しかしそれは、彼が生活人として自立していることを意味しない。「月給だけでは彼のやうな育ちの者でやつて行ける道理がなく、彼が郷里へ帰る時といへば、きまつてその補ひをつけにくる時だ」とされ、「彼自身の生活をすこしでもうるほす為には、当分父のやり口が気に食はなくても口だしは控えて、少しでも父の機嫌をとりむすばうと、エゴイステイツクなサラリーマン根性をいつか身につけていた」とされる。彦英は生活人として自立しきれない青年なのである。

(注8) 初出雑誌の三、四章末尾に「一四年四月浄書」、五、六、七章末尾に「一四年五月浄書」とあるのによる。

(注9) 「拙作について」(「槐」昭和一四年六月)

(注10) 「耕土」(文化山梨社版 昭和二年二月)の後記

(注11) 「農民の現実と作家の感覚」(「槐」昭和一四年一〇月)

(注12) その他にも杉山は、「耕土」では作者が「小作農から自作農になる」とが、完全な例外であるといふこと、そして、自作から小作に転落しつつある農民の姿こそ本質的な形象であるといふことを意識してゐない」点を批判しているが、これについては作者は手を入れていない。

(注13) 事実、「耕土」統編にはそのような傾向が前編より強く現れる。統編では登場人物相互のからみあいは希薄になり、ストーリーはそれとは別に上から展開される傾向が強くなる。それは、前編において、様々な人物の考えや行動のからみあいがストーリーを前進させる原動力となつたのととはやはり異質である。

—むらかみ・りんぞう、兵庫県立宝塚高等学校教諭—